

水仙

太宰治

「忠直卿行状記」という小説を読んだのは、僕が十三か、四のときの事で、それつきり再読の機会を得なかつたが、あの一編の筋書だけは、二十年後のいまもお、忘れずに記憶している。奇妙にかなしい物語であつた。

劍術の上手じょうずな若い殿様が、家来たちと試合をして片っ端から打ち破つて、大いに得意で庭園を散歩していたら、いやな囁ささやきが庭の暗闇の奥から聞えた。

「殿様もこのごろは、なかなかの御上達だ。負けてあげるほうも楽になつた。」

「あははは。」

家来たちの不用心な私語である。

それを聞いてから、殿様の行状は一変した。真実を見たくて、狂った。家来たちに真劍勝負を挑いどんだ。けれども家来たちは、真劍勝負に於いてさえも、本気に戦ってくれなかつた。あつけなく殿様が勝つて、家来たちは死んでゆく。殿様は、狂いまわつた。すでにおそるべき暴君である。ついには家も断絶せられ、その身も監禁せられる。

たしか、そのような筋書であつたと覚えているが、その殿様を僕は忘れる事が出来なかつた。ときどき思ひ出しては、溜息ためいきをついたものだ。

けれども、このごろ、気味の悪い疑念が、ふいと起つ

て、誇張ではなく、夜も眠られぬくらいに不安になった。その殿様は、本当に剣術の素晴らしい名人だったのであるまいか。家来たちも、わざと負けていたのではなくて、本当に殿様の腕前には、かなわなかったのではあるまいか。庭園の私語も、家来たちの卑劣な負け惜しみに過ぎなかったのではあるまいか。あり得る事だ。僕たちだって、佳よい先輩にさんざん自分たちの仕事を罵倒ばとうせられ、その先輩の高い情熱と正しい感覺に、ほとほと参ってしまっても、その先輩とわかれた後で、

「あの先輩もこのごろは、なかなかの元気じゃないか。

もういたわってあげる必要もないようだ。」

「あははは。」

などという実に、賤いやしい私語を交した夜も、ないわけではあるまい。それは、あり得る事なのである。家来というものは、その人柄に於いて、かならず、殿様よりも劣っているものである。あの庭園の私語も、家来たちのひねこびた自尊心を満足させるための、きたない負け惜しみに過ぎなかったのではあるまいか。とすると、慄然りっぜんとするのだ。殿様は、眞実を摑みながら、眞実を追い求めて狂ったのだ。殿様は、事実、劍術の名人だったのだ。家来たちは、決してわざと負けてい

たのではなかった。事実、かなわなかったのだ。それならば、殿様が勝ち、家来が負けるとするのは当然の事で、後でごたごたの起るべき筈はずは無いのであるが、やっぱり、大きい惨事が起ってしまった。殿様が、御自分の腕前に確乎不動の自信を持っていたならば、なんの異変も起らず、すべてが平和であつたのかも知れぬが、古来、天才は自分の真価を知ることはなは甚だうといものだそうである。自分の力が信じられぬ。そこに天才の煩悶はんもんと、深い祈りがあるのであろうが、僕は俗人の凡才だから、その辺のことは正確に説明できない。とにかく、殿様は、自分の腕前に絶対の信頼を置く事

は出来なかつた。事実、名人の卓拔たくばつの腕前を持つていたのだが、信じる事が出来ずに狂つた。そこには、殿様という隔絶された御身分に依る不幸もあつたに違いない。僕たち長屋住居の者であつたら、

「お前は、おれを偉いと思うか。」

「思いません。」

「そうか。」

というだけですむ事も、殿様ともなればそうも行くまい。天才の不幸、殿様の不幸、という具合に考え来ると、いよいよ僕の不安が増大して来るばかりである。似たような惨事が、僕の身边に於いて起つたの

だ。その事件の為に、僕は、あの「忠直卿行状記」を
おのずか

自ら思い出し、そうして一夜、ふいと恐ろしい疑念
にとりつかれたり等して、あれこれ思い合せ、誇張で
はなく、夜も眠られぬほど不安になった。あの殿様は、
本当に剣術が素晴らしく強かったのではあるまいか。
けれども問題は、もはやその殿様の身の上ではない。

僕の忠直卿は、三十三歳の女性である。そうして僕
の役割は、あの、庭園であさましい負け惜しみを言っ
ていた家来であつたかも知れないのだから、いよいよ、
やり切れない話である。

草田惣兵衛氏の夫人、草田静子。このひとが突然、

あたしは天才だ、と言って家出したというのだから、驚いた。草田氏の家と僕の生家とは、別に血のつながりは無いのだが、それでも先々代あたりからお互いに親しく交際している。交際している、などと言うと聞えもいけれど、実情は、僕の生家の者たちは草田氏の家に入りを許されている、とでも言ったほうが当っている。俗にいう御身分も、財産も、僕の生家などとは、まるで段違いなのである。謂いわば、僕の生家のほうで、交際をお願いしているというような具合いなのである。まさしく、殿様と家来である。当主の惣兵衛氏は、まだ若い。若いと言っても、もう四十は越

している。東京帝国大学の経済科を卒業してから、フランスへ行き、五、六年あそんで、日本へ帰るとすぐに遠い親戚筋の家（この家は、のち間もなく没落した）その家のひとり娘、静子さんと結婚した。夫婦の仲も、まず円満、と言つてよい状態であつた。一女をもうけ、はりこ玻璃子と名づけた。パリイを、もじつたものらしい。惣兵衛氏は、ハイカラな人である。背の高い、堂々たる美男である。いつも、にこにこ笑っている。いい洋画を、たくさん持っている。ドガの競馬の画が、その中でも一ばん自慢のものらしい。けれども、自分の趣味の高さを誇るような素振りには、ちつとも見せない。

美術に関する話も、あまりしない。毎日、自分の銀行に通勤している。要するに、一流の紳士である。六年前に先代がなくなつて、すぐに惣兵衛氏が、草田の家を嗣いだのである。

夫人は、——ああ、こんな身の上の説明をするよりも、僕は数年前の、或る日のささやかな事件を描写しよう。そのほうが早道である。三年前のお正月、僕は草田の家に年始に行った。僕は、友人にも時たまそれを指摘されるのだが、よつほど、ひがみ根性の強い男らしい。ことに、八年前ある事情で生家から離れ、自分ひとりで、極貧に近いその日暮しをはじめるように

なつてからは、いつそう、ひがみも強くなつた様子である。ひとに侮辱をされはせぬかと、散りかけている枯葉のように絶えずふるふる命を賭けて緊張している。やり切れない悪徳である。僕は、草田の家には、めつたに行かない。生家の母や兄は、今でもちよいちよい草田の家に、お伺いうかがしているようであるが、僕だけは行かない。高等学校の頃までは、僕も無邪気に遊びに行つていたのであるが、大学へはいつてからは、もういやになつた。草田の家の人たちは、みんないい人ばかりなのであるが、どうも行きたくなくなつた。金持はいやだ、という単純な思想を持ちはじめたので

ある。それが、どうして、三年前のお正月に限って、お年始などに行く気になったかというところ、それは、そもそも僕自身が、だらしなかつたからである。その前年の師走、草田夫人から僕に、突然、招待の手紙が来たのである。

——しばらくお逢い致しません。来年のお正月には、ぜひとも遊びにおいで下さい。主人も、たのしみにして待っております。主人も私も、あなたの小説の読者です。

最後の一句に、僕は浮かれてしまったのだ。恥ずかしい事である。その頃、僕の小説も、少し売れはじめ

ていたのである。白状するが、僕はその頃、いい気になつていた。危険な時期であつたのである。ふやけた
気持でいた時、草田夫人からの招待状が来て、あなた
の小説の読者ですなどと言われたのだから、たまらな
い。ほくそ笑んで、御招待まことにありがたく云々と
色気たつぷりの返事を書いて、そうして翌^{あく}年の正月
一日に、のこのこ出かけて行つて、見事、眉間^{みけん}をざく
りと割られる程の大恥辱を受けて帰宅した。

その日、草田の家では、ずいぶん僕を歓待してくれ
た。他の年始のお客にも、いちいち僕を「流行作家」
として紹介するのだ。僕は、それを擲^や揄^ゆ、侮辱の言葉

と思わなかつたばかりか、ひよつとしたら僕はもう、流行作家なのかも知れないと考え直してみたりなどしたのだから、話にならない。みじめなものである。僕は酔った。惣兵衛氏を相手に大いに酔った。もつとも、酔っぱらつたのは僕ひとりで、惣兵衛氏は、いくら飲んでも顔色も変らず、そうして気弱そうに、無理に微笑して、僕の文学談を聞いている。

「ひとつ、奥さん、」と僕は図に乗つて、夫人へ盃をさした。「いかがです。」

「いただきません。」夫人は冷く答えた。それが、なんとも言えず、骨のずいに徹するくらいの冷厳な語調で

あつた。底知れぬ軽蔑感が、そのたつた一語に、こめられて在つた。僕は、まいった。酔いもさめた。けれども苦笑して、

「あ、失礼。つい酔いすぎて。」と軽く言つてその場をごまかしたが、腸が煮えくりかえつた。さらに一つ。

僕は、もうそれ以上お酒を飲む気もせず、ごはんを食べる事にした。蜆汁しじみじるがおいしかった。せつせと貝の肉を箸はしでほじくり出して食べていたら、

「あら、」夫人は小さい驚きの声を挙げた。「そんなもの食べて、なんともありません？」無心な質問である。

思わず箸とおわんを取り落しそうだった。この貝は、

食べるものではなかったのだ。蜆汁は、ただその汁だけを飲むものらしい。貝は、ダシだ。貧しい者にとつては、この貝の肉だってなかなかおいしいものだが、上流の人たちは、この肉を、たいへん汚いものとして捨てるのだ。なるほど、蜆の肉は、お臍へそみたいで醜悪だ。僕は、何も返事が出来なかった。無心な驚きの声であつただけに、手痛かつた。ことさらに上品ぶつて、そんな質問をするのなら、僕にも応答の仕様がある。けれども、その声は、全く本心からの純粹な驚きの声なのだから、僕は、まいった。なりあがり者の「流行作家」は、箸とおわんを持ったまま、うなだれて、何

も言えない。涙が沸わいて出た。あんな手ひどい恥辱を受けた事がなかった。それつきり僕は、草田の家へは行かない。草田の家だけでなく、その後は、他のお金持の家にも、なるべく行かない事にした。そうして僕は、意地になって、貧乏の薄汚い生活を続けた。

昨年の九月、僕の陋屋ろうおくの玄関に意外の客人が立っていた。草田惣兵衛氏である。

「静子が来ていませんか。」

「いいえ。」

「本当ですか。」

「どうしたのです。」僕のほうで反問した。

何かわけがあるらしかった。

「家は、ちらかつていますから、外へ出しましょう。」きたない家の中を見せたくなかった。

「そうですね。」と草田氏はおとなしく首肯うなずいて、僕のあとについて来た。

少し歩くと、井の頭公園である。公園の林の中を歩きながら、草田氏は語った。

「どうもいけません。こんどは、しくじりました。薬が、ききすぎました。」夫人が、家出をしたというのである。その原因が、実に馬鹿げている。数年前に、夫人の実家が破産した。それから夫人は、妙に冷く取り

すました女になった。実家の破産を、非常な恥辱と考
えてしまったらしい。なんでもないじゃないか、とい
くら慰めてやっても、いよいよ、ひがむばかりだとい
う。それを聞いて僕も、お正月の、あの「いただきま
せん」の異様な冷厳が理解できた。静子さんが草田の
家にお嫁に来たのは、僕の高等学校時代の事で、その
頃は僕も、平気で草田の家がちよいちよい遊びに行っ
ていたし、新夫人の静子さんとも話を交して、一緒に
映画を見に行った事さえあったのだが、その頃の新夫
人は、決してあんな、骨を刺すような口調でものを言
う人ではなかった。無智なくらいに明るく笑うひと

だった。あの元旦に、久し振りで顔を合せて、すぐに僕は、何も言葉を交さぬ先から、「変ったなあ」と思っていたのだが、それでは矢張り、やは実家の破産という憂愁が、あのひとをあんなにひどく変化させてしまっていたのに違いない。

「ヒステリイですね。」僕は、ふんと笑って言った。

「さあ、それが。」草田氏は、僕の軽蔑に気がつかなくなかったらしく、まじめに考え込んで、「とにかく、僕がわるいんです。おだて過ぎたのです。薬がききすぎました。」草田氏は夫人を慰める一手段として、夫人に洋画を習わせた。一週間にいちどずつ、近所の中泉花仙と

かいう、もう六十歳近い下手へたくそな老画伯のアトリエに通わせた。さあ、それから褒ほめた。草田氏をはじめ、その中泉ちゅうせんという老耄ろうもうの画伯と、それから中泉のアトリエに通っている若い研究生たち、また草田の家に入いりしている有象無象うぞうむぞう、寄よつてたかつて夫人の画を褒ほめちぎって、あげくの果は夫人の逆上さかあがりという事になり、「あたしは天才だ」と口走くちそうつて家出したというのであるが、僕は話を聞きながら何度も嘖いんき出しそうになつて困こつた。なるほど薬くすりがききすぎた。お金持かねもちの家庭けいたいにありがちありな、ばかばかしい喜劇きげきだ。

「いつ、飛び出したんです。」僕は、もう草田夫妻を、

ばかにし切っていた。

「きのうです。」

「なあんだ。それじゃ何も騒ぐ事はないじゃないですか。僕の女房だって、僕があんまりお酒を飲みすぎると、里へ行つて一晩泊つて来る事がありますよ。」

「それとこれとは違います。静子は芸術家として自由な生活をしたいたんだそうです。お金をたくさん持つて出ました。」

「たくさん？」

「ちよつと多いんです。」

草田氏くらいのお金持が、ちよつと多い、というく

らいだから、五千円、あるいは一万円くらいかも知れないと僕は思った。

「それは、いけませんね。」はじめて少し興味を覚えた。貧乏人は、お金の話には無関心でおれない。

「静子はあなたの小説を、いつも読んでいましたから、きつとあなたのお家へお邪魔にあがっているんじゃないかと、——」

「冗談じゃない。僕は、——」敵です、と言おうと思つたのだが、いつもにこにこ笑っている草田氏が、きょうばかりは蒼あおくなつてしよげ返つているその様子を目前に見て、ちよつと言ひ出しかねた。

吉祥寺の駅の前でわかれたが、わかれる時に僕は苦笑しながら尋ねた。

「いったい、どんな画をかくんです？」

「変っています。本当に天才みたいなところもあります。です。」意外の答であった。

「へえ。」僕は二の句が継げなかった。つくづく、馬鹿な夫婦だと思つて、呆あきれた。

それから三日目だったか、わが天才女史は絵具箱をひっさげて、僕の陋屋に出現した。菜葉服なつばくのような粗末な洋服を着ている。気味わるいほど頬がこけて、眼が異様に大きくなっていた。けれども、謂いわば、一流

の貴婦人の品位は、犯しがたかった。

「おあがりなさい。」僕はことさらに乱暴な口をきいた。「どこへ行っていたのですか。草田さんがとても心配していましたよ。」

「あなたは、芸術家ですか。」玄関のたたきにつつ立つたまま、そつぽを向いてそう呟つぶやいた。れいの冷い、高慢な口調である。

「何を言っているのです。きざな事を言つてはいけません。草田さんも閉口していましたよ。玻璃子ちゃんつぶやのいるのをお忘れですか？」

「アパートを捜しているのですけど、」夫人は、僕の言

葉を全然黙殺している。「このへんにありませんか。」

「奥さん、どうかしていただけますね。もの笑いの種ですよ。およしになって下さい。」

「ひとりで仕事をしたいのです。」夫人は、ちつとも悪びれない。「家を一軒借りても、いいんですけど。」

「葉がききすぎたと、草田さんも後悔していましたよ。二十世紀には、芸術家も天才もないんです。」

「あなたは俗物ね。」平気な顔をして言った。「草田のほうか、まだ理解があります。」

僕に対して、こんな失敬なことを言うお客には帰ってもらうことにしている。僕には、信じている一事が

あるのだ。誰かれに、わかってもらわなくともいいのだ。いやなら来るな。

「あなたは、何しに来たのですか。お帰りになったらどうですか。」

「帰ります。」少し笑って、「画を、お見せしましょうか。」

「たくさんです。たいていわかっています。」

「そう。」僕の顔を、それこそ穴のあくほど見つめた。

「さようなら。」

帰ってしまった。

なんという事だ。あのひとは、たしか僕と同じとし

の筈だ。十二、三歳の子供さえあるのだ。人におだてられて発狂した。おだてる人も、おだてる人だ。不愉快な事件である。僕は、この事件に対して、恐怖をさえ感じた。

それから約二箇月間、静子夫人の来訪はなかったが、草田惣兵衛氏からは、その間に五、六回、手紙をもらった。困り切っているらしい。静子夫人は、その後、赤坂のアパートに起居して、はじめは神妙に、中泉画伯のアトリエに通っていたが、やがてその老画伯をも軽蔑して、絵の勉強は、ほとんどせず、画伯のアトリエの若い研究生たちを自分のアパートに呼び集めて、そ

の研究生たちのお世辞に酔って、毎晩、有頂天の馬鹿騒ぎをしていた。草田氏は恥をしのんで、单身赤坂のアパートを訪れ、家へ帰るように懇願したが、だめであった。静子夫人には、鼻であしらわれ、取巻きの研究生たちにさえ、天才の敵として攻撃せられ、その上、持っていたお金をみんな巻き上げられた。三度おとずれたが、三度とも同じ憂目うきめに逢った。もういまでは、草田氏も覚悟をきめている。それにしても、玻璃子が不憫ふびんである。どうしたらよいのか、男子としてこんな苦しい立場はない、と四十歳を越えた一流紳士の草田氏が、僕に手紙で言って寄こすのである。けれども僕

も、いつか草田の家で受けたあの恥辱を忘れてはいない。僕には、時々自分でもぞつとするほど執念深いところがある。いちど受けた侮辱を、どうしても忘れる事が出来ない。草田の家の、此この度たびの不幸に同情する気持など少しも起らぬのである。草田氏は僕に、再三、「どうか、よろしく静子に説いてやって下さい」と手紙でたのんで来ているのだが、僕は、動きたくなかった。お金持の使い走りはいやだった。「僕は奥さんに、たいへん軽蔑されている人間ですから、とてもお役には立ちません。」などと言って、いつも断っていたのである。

十一月のはじめ、庭の山茶花さざんかが咲きはじめた頃であつた。その朝、僕は、静子夫人から手紙をもらつた。

——耳が聞えなくなりました。悪いお酒をたくさん飲んで、中耳炎を起したのです。お医者に見せましたけれども、もう手遅れだそうです。薬缶やかんのお湯が、シユンシユン沸いている、あの音も聞えませんが、窓の外で、樹の枝が枯葉を散らしてゆれ動いておりますが、なんにも音が聞えませんが。もう、死ぬまで聞く事が出来ません。人の声も、地の底から言っているようにしか聞えませんが。これも、やがて、全く聞えなくなるのでしよう。耳がよく聞えないという事が、どんなに淋さびしい、

もどかしいものか、今度という今度は思い知りました。買物などに行つて、私の耳の悪い事を知らない人達が、ふつうの人に話すようにものを言うので、私には、何を言っているのか、さっぱりわからなくて、悲しくなつてしまいます。自分をなぐさめるために、耳の悪いあの人やこの人の事など思い出してみて、ようやくの事で一日を過します。このごろ、しよつちゆう、死にたい死にたいと思います。そうしては、玻璃子の事が思い浮んで来て、なんとかしてねばつて、生きていなければならぬと思いかえます。こないだうち、泣くと耳にわるいと思つて、がまんにがまんしていた涙を、

つい二、三日前、こらえ切れなくなつて、いちどに、滝のように流しましたら、気分がいくらか楽になりました。もういまでは、耳の聞えない事に、ほんの少し、あきらめも出て来ましたが、悪くなりはじめの頃は、半狂乱でしたの。一日のうちに、何回も何回も、火箸しほでもつて火鉢のふちをたたいてみます。音がよく聞えるかどうか、ためしてみるのです。夜中でも、目が覚めさえすれば、すぐに寢床に腹這いになって、ぽんぽん火鉢をたたいてみます。あさましい姿です。畳を爪つめでひつかいてみます。なるべく聞きとりにくいような音をえらんでやってみるのです。人がたずねて来ると、

その人に大きな声を出させたり、ちいさい声を出させたり、一時間も二時間も、しつこく続けて注文して、いろいろさまざま聴力をためしてみるので、お客様たちは閉口して、このごろは、あんまりたずねて来なくなりしました。夜おそく、電車通りにひとりで立っていて、すぐ目の前を走って行く電車の音に耳をすましていることもありました。

もう今では、電車の音も、紙を引き裂くくらい小さい音になりました。間も無く、なんにも聞えなくなるのでしよう。からだ全体が、わるいようです。毎夜、お寝巻を三度も取りかえます。寝汗でぐしょぐしょに

なるのです。いままでかいた絵は、みんな破って棄
てました。一つ残さず棄てました。私の絵は、とても下
手だったのです。あなただけが、本当の事をおっしゃ
いました。他の人は、みんな私を、おだてました。私
は、出来る事なら、あなたのように、まずしくとも気
楽な、芸術家の生活をしたかった。お笑い下さい。私
の家は破産して、母も間もなく死んで、父は北海道へ
逃げて行きました。私は、草田の家にいるのが、つら
くなりました。その頃から、あなたの小説を読みはじ
めて、こんな生きかたもあるか、と生きる目標が一つ
見つかったような気がしていました。私も、あなたと

同じ、まずしい子です。あなたにお逢いしたくなりま
した。三年前のお正月に、本当に久し振りにお目にか
かる事が出来て、うれしゅうございました。私は、あ
なたの気ままな酔いかたを見て、ねたましいくらい、
うらやましく思いました。これが本当の生きかただ。
虚飾も世辞もなく、そうしてひとり誇りを高くして生
きている。こんな生きかたが、いいなあと思いました。
けれども私には、どうする事も出来ません。そのうち
に主人が私に絵をかく事をすすめて、私は主人を信じ
ていますので、（いまでも私は主人を愛しております）
中泉さんのアトリエに通う事になりましたが、たちま

ち皆さんの熱狂的な賞讃の的まになり、はじめは私もただ当惑いたしました。主人まで真顔になつて、お前は天才かも知れぬなどと申します。私は主人の美術鑑賞眼をとても尊敬していたしましたので、とうとう私も逆上し、かねてあこがれの芸術家の生活をはじめつつも、りで家を出ました。ばかな女ですね。中泉さんのアトリエにかよっている研究生たちと一緒に、二、三日箱根で遊んで、その間に、ちよつと気にいった絵が出来ましたので、まず、あなたに見ていただきたくて、いさんであなたのお家へまいりましたのに、思いがけず、いさんごんな目に逢いました。私は恥ずかしゆうござい

ました。あなたに絵を見てもらって、ほめられて、そうして、あなたのお家の近くに間借りでもして、お互いまずしい芸術家としてお友だちになりたいと思っていました。私は狂っていたのです。あなたに面罵めんばせられて、はじめて私は、正気になりました。自分の馬鹿を知りました。わかい研究生たちが、どんなに私の絵を褒めても、それは皆あさはかなお世辞で、かげでは舌を出しているのだという事に気がつきました。けれどもその時には、もう、私の生活が取りかえしのつかぬところまで落ちていました。引き返すことが出来なくなっていました。落ちるところまで落ちて見ましょ

う。私は毎晩お酒を飲みました。わかい研究生たちと徹夜で騒ぎました。焼酎しようちゆうも、ジンも飲みました。きざな、ばかな女ですね。

愚痴ぐちは、もう申しますまい。私は、いさぎよく罰を受けます。窓のそとの樹の枝のゆれぐあいで、風がひどいなと思っっているうちに、雨が横なぐりに降って来ました。雨の音も、風の音も、私にはなんにも聞えませぬ。サイレントの映画のようで、おそろしいくらい、淋しい夕暮です。この手紙に御返事は要りませんのですよ。私のことは、どうか気になさらないで下さい。淋しさのあまり、ちよつと書いてみたのです。あなた

は平気でいらして下さい。――

手紙には、アパートのところ番地も認められていた。僕は出掛けた。

小綺麗なアパートであったが、静子さんの部屋は、ひどかった。六畳間で、そうして部屋には何もなかった。火鉢と机、それだけだった。畳は赤ちやけて、しめっぽく、部屋は日当りも悪くて薄暗く、果物の腐ったようないやな匂いがしていた。静子さんは、窓縁に腰かけて笑っている。さすがに身なりは、きちんとしている。顔にも美しさが残っている。二箇月前に見た時よりも、ふとったような感じもするが、けれども、

なんだか気味がわるい。眼に、ちからが無い。生きて
いる人の眼ではなかった。瞳ひとみが灰色に濁っている。

「無茶ですね！」と僕は叫ぶようにして言ったのであるが、静子さんは、首を振って、笑うばかりだ。もう全く聞えないらしい。僕は机の上の用箋に、「草田ノ家へ、カエリナサイ」と書いて静子さんに読ませた。それから二人の間に、筆談がはじまった。静子さんも机の傍に坐って熱心に書いた。

草田ノ家へ、カエリナサイ。

スミマセン。

トニカク、カエリナサイ。

カエレナイ。

ナゼ？

カエルシカク、ナイ。

草田サンガ、マツテル。

ウソ。

ホント。

カエレナイノデス。ワタシ、アヤマチシタ。

バカダ。コレカラドウスル。

スミマセン。ハタラクツモリ。

才金、イルカ。

ゴザイマス。

絵ヲ、ミセテクダサイ。

ナイ。

イチマイモ？

アリマセン。

僕は急に、静子さんの絵を見たくなったのである。妙な予感がして来た。いい絵だ、すばらしくいい絵だ。きつと、そうだ。

絵ヲ、カイテユク気ナイカ。

ハズカシイ。

アナタハ、キツトウマイ。

ナグサメナイデホシイ。

ホントニ、天才カモ知レナイ。

ヨシテ下サイ。モウオカエリ下サイ。

僕は苦笑して立ちあがった。帰るより他はない。静子夫人は僕を見送りもせず、坐ったまままで、ぼんやり窓の外を眺めていた。

その夜、僕は、中泉画伯のアトリエをおとずれた。

「静子さんの絵を見たいのですが、あなたのところにありませんか。」

「ない。」老画伯は、ひとの好きそうな笑顔で、「御自分で、全部破ってしまったそうじゃないですか。天才的だったのですがね。あんなに、わがままじゃいけま

せん。」

「書き損じのデッサンでもなんでも、とにかく見たいのです。ありませんか。」

「待てよ。」老画伯は首をかたむけて、「デッサンが三枚ばかり、私のところに残っていたのですが、それを、あのひとが此の間やって来て、私の目の前で破ってしまいました。誰か、あの人の絵をこっぴどくやつけたらしく、それからもう、あ、そうだ、ありました、ありました、まだ一枚のこっています。うちの娘が、たしか水彩を一枚持っていた筈です。」

「見せて下さい。」

「ちよつとお待ち下さい。」

老画伯は、奥へ行つて、やがてにこにこ笑いながら一枚の水彩を持って出て来て、

「よかつた、よかつた。娘が秘蔵していたので助かりました。いま残っているのは、おそらく此の水彩いちまいだけでしよう。私は、もう、一万円でも手放しませんよ。」

「見せて下さい。」

水仙の絵である。バケツに投げ入れられた二十本程の水仙の絵である。手にとってちらと見てビリビリと引き裂いた。

「なにをなさる！」老画伯は驚愕きょうがくした。

「つまらない絵じゃありませんか。あなた達は、お金持の奥さんに、おべっかを言っていただけなんだ。そうして奥さんの一生を台無しにしたのです。あの人をこっぴどくやつつけた男というのは僕です。」

「そんなに、つまらない絵でもないでしょう。」老画伯は、急に自信を失った様子で、「私には、いまの新しい人たちの画は、よくわかりませんが。」

僕はその絵を、さらにこまかに引き裂いて、ストローにくべた。僕には、絵がわかるつもりだ。草田氏にさえ、教える事が出来るくらいに、わかるつもりだ。

水仙の絵は、断じて、つまらない絵ではなかった。美事だった。なぜそれを僕が引き裂いたのか。それは読者の推量にまかせる。静子夫人は、草田氏の手許に引きとられ、そのとしの暮に自殺した。僕の不安は増大する一方である。なんだか天才の絵のようだ。おのずから忠直卿の物語など思い出され、或る夜ふと、忠直卿も事実素晴らしい剣術の達人だったのではあるまいかと、奇妙な疑念にさえとらわれて、このごろは夜も眠られぬくらいに不安である。二十世紀にも、芸術の天才が生きているのかも知れぬ。

底本…「太宰治全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年1月31日第1刷発行

底本の親本…「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6
月

入力…柴田卓治

校正…高橋真也

2000年4月1日公開

2005年10月28日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。